

## 平成 29 年度 夏季学術講習会が開催されました！



7月2日（日曜日）、福島県立医科大学 会津医療センターにおいて平成 29 年度 夏季学術講習会が開催されました。県内の会員だけでなく、山形県等、県外からの参加者もあり、26名の先生方でたくさん学んできました。



第1部は会津医療センター 循環器内科学講座 宗像源之先生による『めまい・フラつきについて』。毎回好評の宗像先生のご講演。今回も鍼灸院で遭遇するケースが多いめまいについて、豊富なご経験をもとに解りやすく解説していただきました。

「めまいの診療で最も大切なこと、それは中枢性めまい（脳からくるめまい）を絶対に見逃さないこと」「良性発作性頭位めまい症（以下 BPPV）を完全に理解すること」と力説されておられました。

めまいを訴える患者さんの半数以上が BPPV（統計では約 54%）ということで、BPPV を理解していればスクリーニングにもなり、より正確な診断が可能になります。

「めまいとポリファーマシーとの関係」「眼振を見ずに眼球運動を見るのが大切」「めまいに効く薬はない（断言）」など、膨大な知識と経験をしっかり落とし込んでいる宗像先生だからできる内容でした。めまいが劇的に良くなる Epley 法の動画もご準備していただき、体得したい技術になりました。



第2部は会津医療センター 漢方医学講座 鈴木雅雄先生による『COPDの鍼灸治療』。全世界に衝撃を与えた論文で有名な鈴木先生ですが、実際にCOPDの研究に関して聴講した方は少ないはず。今回は貴重なご講演となりました。

「COPDって苦しい上にめちゃくちゃお金がかかるんですよ」という一言から始まったご講演。ほぼ原因がタバコであることから、耳が痛かった会員の先生方もおられたのではないのでしょうか。自分にとって都合の悪い情報を無視したり、過小評価してしまうことを正常性バイアスと言いますが、喫煙習慣のある方はこのバイアスが働いている、と先生。

COPDの治療目標として、息切れの症状を取ることを念頭に置いてしまいがちですが、生活の運動機能を上げることが予後をよくすることにつながる、つまり「楽に歩ける、楽に動けること」を目標に治療を行うと仰っていたことが印象的でした。

大変アカデミックな内容についていくのが精一杯でした。日頃の勉強不足がこういう場面で露呈しますね……。

最後、第3部は福島県鍼灸師会 保険部長兼副会長 箱岩義郎先生の『スポーツ傷害 適応の判定』。自身も多くのスポーツをプレイし、怪我をされてきたご経験を日常診療に活かしておられます。

スポーツ障害の患者さんを診察する上で大切なことは「選手目線で診療に当たる」ということ。具体的には、スポーツの種目を知ること（できれば実際にプレイしてみる）、スポーツの動きを知ること（負担のかかる部位はどこか？ 発達する筋はどこか？ 弱い筋はどこか？）等と解説していただきました。



実際にスポーツを経験していれば、目の前の患者さん（選手）がどんな動きで痛めたのか、どのシチュエーションで痛みやすいのかが理解しやすくなります。これはスポーツ障害の本だけでは知ることができない、とても大切なものです。また、施術者がそのスポーツのことに詳しくれば（プレイ経験があれば）悩んでいる患者さんも伝えやすいですし、信頼感が増します。

「適応の判定」ということで、何でもかんでも鍼灸で対応しようということではなく、精査を勧めた方がよい場合や禁忌の場合など、判断が難しい場面のお話もしていただきました。さらに箱岩先生は「現場復帰に鍼灸はどう役立ってるのか」というテーマで診療に当たられておられます。スポーツ障害は現場復帰させることがゴールであり、ベッドの上だけでなく現場を見据えた箱岩先生の想いに気付かされるが多かったご講演でした。